

申請者	看護課	金田 希
No.72	寝たきり高齢者へのスキンケア対策 ～乾燥肌に対するハーブピネガーの有効性～	
研究の概要	<p>高齢者の皮膚は加齢によって、乾燥によって全体に萎縮傾向を示し、皮膚の非薄化や弾力性の低下、皮脂の分泌の減少などによって、乾燥し傷つき易い状態となっており、種々の感染を起こしやすい。これは毎日のスキンケアで改善するとされている。そこで今回、当病棟の寝たきり高齢者10名の角質層水分量を測定した結果、最も値が低く、乾燥肌が著しい男性患者1名を選択した。</p> <p>先行研究で、手の亀裂に対して保湿効果が得られ、皮膚状態が改善したとされるハーブピネガーをこの対象患者に使用することで、どの程度の保湿効果が維持できるのか、明らかにしたいと思った。</p>	
判定	承認	

申請者	看護課	東江 雄介
No.73	服薬自己管理を目指した取り組み 一看護者が行う服薬指導、SSTの見直しを試みてー	
研究の概要	<p>SSTの中で服薬プログラムを取り入れた服薬指導を通し、服薬の必要性や継続することの大切さを理解してもらい、患者自身が自主的に服薬できるよう指導していく。</p>	
判定	承認	

申請者	看護課	鍋谷 陽子
No.74	認知症患者の転倒予防に向けて フットケアをこころみて	
研究の概要	<p>当病棟は、認知症に伴う徘徊・不眠・幻覚幻想・興奮・介護抵抗などの行動障害が著しく、施設や住宅での対応が困難な方が入院している病棟です。薬物療法・生活機能回復訓練を行い、行動障害の緩和や認知症の進行を抑え、生活リズムを整え、日常生活能力の維持に努める。</p> <p>平均年齢75歳という高齢ではあるが、生活機能回復訓練に参加する為には座位姿勢が必要であり、転倒リスクのある患者は車椅子に乗っている。患者の足の状態を観察すると、下腿～足指まで浮腫が認められることが多い。また、起床から就床まで靴を履いているため、足趾間が圧迫され、湿潤・浸軟がみられる。Tinettiらは、腫脹症、爪先の変形、潰瘍、足趾の爪の変形を有する75歳以上の被験者では、転倒の可能性が80%も増大すると言われており、そのような高齢者に継続的にフットケアを行ったところ、転倒予防に有効な下肢筋力の維持・向上や、姿勢制御能の向上がみられたと述べられています。姫野らも足部・足爪の異常と転倒の関連と、フットケアの重要性を述べており、高齢者に対するフットケアの重要性が除去に示されつつあります。</p> <p>高齢者は筋力の低下、バランス能力の低下、筋や関節の拘縮が認められる。それは、歩こうとすると、足が踏み出せない状態となり、つまずきやすく、立位の基底面積も狭くなり、結果として転倒しやすくなります。</p> <p>今回、足の観察表を元にアセスメントを行い、足浴と足趾のアーチの手入れや足のマッサージなどのフットケアを取り入れることで、立位の基底面積の拡大、バランス機能の改善、浮腫が軽減することを目的に取り組みたい。</p>	
判定	承認	

申請者	看護課	地崎 修治
No.75	マインドマップの効果を検証して	
研究の概要	<p>医療観察法病棟には重大な他害行為を起こした医療観察法対象者(以下、患者とする)が入院しており、治療課題として病識の獲得や内省、同様の他害行為の再発防止が求められている。そこで、患者の問題点の整理や思考内容について理解の共有を図り、治療への適応を改善することができないかと考え、昨年度より治療プログラムにマインドマップを取り入れた。</p> <p>昨年度の看護研究は、マインドマッププログラムに参加した患者をもつプライマリ看護師を対象にインタビューを実施した。患者は、1患者が集中していた2患者が楽しそう3話が広がる4話の焦点がずれない5振り返りがしやすい6次回への意欲がある7新しい発見ができた8共通認識ができた、の8項目でマインドマップの効果があげられた。</p> <p>今回、マインドマッププログラムに参加した患者に対し、アンケートを実施し看護師のインタビュー結果の8項目と共有する部分があるか検証する。また、患者がマインドマップを通して感じたことや治療効果を感じる部分があるか、アンケートを通して検証する。</p> <p>研究方法 研究デザイン: 調査研究 研究対象者: マインドマッププログラムに参加した患者10名 研究機関: 平成23年6月～10月 研究場所: 国立病院機構北陸病院6病棟 データの収集法: マインドマップに参加した患者を対象に実施する データの分析法: アンケートで得た結果を統計処理する(ノンパラメトリック分析)</p>	
判定	承認	

申請者	看護課	川開 陽子
No.76	長期寡黙の状態からSST導入により反応、返答が可能となった統合失調症の一事例	
研究の概要	<p>長期入院中の統合失調症患者のA氏は無為、自閉的で作業療法にも参加できない状態であったが、SSTに誘ってみたところ最初は、その場に座っているだけであったが、会を重ねると、声かけに顔を上げ、視線を合わせる、発語が聞かれるなどの変化がみられた。このことから、長期に無為、自閉的な状態であっても、SSTを継続することでA氏の送信技能を高め、自己表現の助けになればA氏からの反応がみられるのではないかと考えた。そこでA氏の認知技能(受信・処理・送信技能)を評価し、できている事は積極的に褒め、不足していることに対し、言語的コミュニケーション方法(①筆談②メッセージカードの利用③声に出す)を段階的に提示し、A氏と共有できるものを取り入れたSSTを継続し、自己表現できるよう支援する。</p>	
判定	承認	

申請者	看護課	水内 隆徳
No.77	食事場面における行動障害を減らす取り組み	
研究の概要	<p>当病棟は強度行動障害を持つ重症心身障がい児(者)がほとんどある。そのため日常的に多動、疾走、奇声、自傷、固執、攻撃、不眠、異食などの行動上の問題がみられる。K氏には食事場面において介助者に対する執拗な他害や自傷行為から、食事に集中出来ていない現状である。また他害によって介助側の受傷が絶えず、対応が困難な状況もみられた。患者様は食事中に自傷・他害に夢中になることで、食事本来の形である「楽しく食べる」ことができていないと考えられた。飯田雅子は「強度行動障害がというのは、その人が生来的に持っている資質そのものではなく、資質と不適切な育て方との相互交渉の中で形づくられた状態であり、適切な働きかけをすることで軽減することが可能です」「(対応のまずさ)が原因の7割」と述べている。先行研究では噛みつき行為や破壊行動といった行動障害のある患者さまに対して、落ち着いた食事ができる環境を個別に用意し、情緒の安定を図ることで行動障害を減らす取り組みに成功している。今回、障害児の認知や理解の方法に合わせて関わり方を統一し、統制された場面設定で教育を進める「構造化」をもとに、K氏の自傷・他害の減少が予測される関わり方を選択し、実践することで食事に集中できるように援助したい。</p>	
判定	承認	

平成23年度 第2回倫理委員会 平成23年9月6日

申請者	療育指導室	上里 政博
No.78	成年後見業務に不安を持たれている御家族との面談経過を通して	
研究の概要	<p>成年後見業務に不安を持たれている後見人(御家族)に対して、面談を行い、問題の解決を図っていく。</p>	
判定	承認	

申請者	療育指導室	大宅 京子
No.79	社会体験の援助 -「紅茶の時間」を実施して-	
研究の概要	<p>当病棟は、動く重症心身障害児(者)病棟であるため、強度行動障害のスコアが高く、長期入院により、御家族の高齢化も進んできており、外出・外泊等が困難な患者も多い。そのため、療育の中で、社会体験を援助する活動を取り入れることで、GOLの向上を図っていく。</p>	
判定	承認	

平成23年度 第2回倫理委員会 平成23年9月13日

申請者	看護課	水上 礼子
No.80	医療観察法における担当多職種面接の実施状況と活用方法の検討	
研究の概要	<p>「厚生労働科学研究費補助金 重大な他害行為を起こした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究(研究者:平林直次)の一環 医療観察法では、担当多職種チームによる対象者との面接は、入院全期間を通して治療の基盤となる重要な治療手段と考えます。しかし、現状では、施設ごと、多職種チーム毎に主体性を発揮するとともに実施状況にはばらつきがあると思われま。本研究では指定入院医療機関における担当多職種面接の実施状況を明らかにすることを通じて、担当多職種面接の活用方法を検討したい。</p>	
判定	承認	

平成23年度 第3回倫理委員会 平成23年11月10日

申請者	診療部	小林 信周
No.81	当院を受診する認知症患者の現状	
研究の概要	認知症の外來初診患者の診療記録から、年齢、性別、受診経路、紹介元・依頼元、要介護度、認知症疾患の診断名、簡易認知機能検査得点、BPSD、併存する身体疾患名、医療的介入、初診3ヶ月後の転帰についての情報を収集し、当院の認知症医療の現状を考察する。	
判定	承認	

申請者	診療部	坂本 宏
No.82	国立病院機構精神科病院における2011年度多施設共同患者調査(北陸病院)	
研究の概要	<p>これまでに全国14～20ヶ所の旧・国立精神療養所(現在の独立行政法人国立病院機構の精神科病院、独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院および独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院)の精神科病床に入院している全ての患者を対象とした「多施設共同患者調査(Japn Extensive Study of Schizophrenia:JESS)」と呼ばれる横断調査(cross-sectional survey)が1989年から2005年までの間に6回にわたって実施された。</p> <p>これらの調査によって、調査日に旧・国立精神療養所の精神科病床に入院していた患者の診断、発病年齢、入院期間、精神症状、社会機能、退院可能性、処方内容などに関するデータベースが作成され、さまざまな解析が行われた。</p> <p>統合失調症を中心に解析がなされ、わが国の精神医療の抱える多剤大量の薬物療法の実態を報告し、他の研究チームを立ち上げ、安全で実践的な減量単純化の方法とその効果についても検証された。</p> <p>また、対象者の死亡リスクを健常者と比較した標準化死亡比が、2倍以上となることと等を報告してきた。</p> <p>今回申請する調査(通称:JESS2011)は、厚生労働省精神・神経研究開発費「21委一1統合失調症の診断、治療法の開発に関する研究(主任研究者:安西信雄)」の分担研究である「統合失調症の標準的治療の普及とその効果に関する研究(分担研究者:塚田和美)」の一環として行われる通算7回目の多施設共同の実態調査である。</p> <p>主要な目的は、以下の2点である。</p> <p>i)旧・国立精神療養所に2011年11月30日の時点で入院している患者の性別、年齢、入院期間、診断、処遇、精神症状の重症度、社会機能の程度、発病年齢、教育年数、結婚歴、投与されている薬剤、身長、体重などといった諸因子に関する実態を調査する。</p> <p>ii) JESS2000、JESS2005と今回のJESS2011のデータの比較を行い、特に薬物療法の変化等について検証する。</p>	
判定	承認	

申請者	診療部	白石 潤
No.83	「抗精神病薬の多剤大量投与の安全で効果的なのは正に関する臨床研究」	
研究の概要	<p>1. 抗精神病薬の減量観察試験</p> <p>12～24週かけて、定められたプロトコールに従い現処方から抗精神病薬を減量し、精神症状・QOLの変化を観察。減量しないで観察する群と無作為割り付けを行うオープン試験。新規の薬剤・治療法による介入は行わない。</p> <p>2. 抗精神病薬の処方調査</p> <p>1. を実施するうえでの、選択バイアスの除外・評価をするため、協力施設の一定日目の抗精神病薬の処方を調査する。これはまた、多剤大量処方の現状を鳥瞰する目的で、行政からの要請による。</p> <p>3. 抗精神病薬血中濃度測定、生化学的マーカー測定(実施可能施設のみ)</p> <p>1. の生物的背景を探索するため、また薬物の多剤大量処方による症状等変化の基盤を検証するために行う。</p>	
判定	承認	

平成23年度 第5回倫理委員会 平成24年1月12日

申請者	薬剤科	柏 宗神
No.84	塩酸ドネペジル口腔内崩壊錠の味覚に関する製剤的技術の違いが患者の嗜好性に与える影響	
研究の概要	<p>先発薬品の塩酸ドネペジルの苦みに対するカラギーナンを使用した製剤技術には特許があるために後発薬品の塩酸ドネペジルのメーカー各々の製剤的工夫により対処されているが、GEへの切り替えに際しては苦みや痺れが問題になる可能性がある。塩酸ドネペジルの先発薬品から後発薬品へ切り替えた認知症患者を対象とし、後発薬品に切り替えた際の薬剤嗜好性についてアンケート調査を行う。</p> <p>調査項目:年齢、性別、塩酸ドネペジルGEの嗜好性(POM調査票)とその理由、薬に対する嗜好性、要望</p>	
判定	条件付承認	

申請者	薬剤科	柏 宗神
No.85	抗精神病薬服用中の2型糖尿病患者におけるDPP-4阻害薬の有用性の検討	
研究の概要	<p>抗精神病薬服用中の2型糖尿病患者を対象とし、DPP-4阻害剤であるシタグリプチンを投与した際の有効性および安全性について検討する。</p> <p>観察機関：24週間</p> <p>臨床研究担当医師は、以下の手順でシタグリプチン50mgの投与を開始する。</p> <p>①食事・運動療法のみ実施 →シタグリプチン50mgを新規投与(単剤群)</p> <p>②食事・運動療法に加えて、糖尿病治療薬処方 →シタグリプチン50mgを追加投与(併用群)</p> <p>治療開始により4週間は前述の治療を継続し、効果不十分な場合は、シタグリプチンを100mgに増量し、更に12週後、効果不十分な場合は、他糖尿病治療薬の追加・増量・変更を行う。また、臨床研究担当医師の判断で、シタグリプチン25mgへの減量、他糖尿病治療薬の減量、中止も可とする。なお、抗精神病薬を含め、糖尿病治療薬以外の治療薬並びに食事・運動療法、特定健康用食品は治療期間中、やむをえない場合を除き、変更しない。</p>	
判定	再審査	
平成23年度 第6回倫理委員会 平成24年2月8日		

申請者	診療部	吉田 光宏
No.86	「富山県における結核菌分子疫学調査」	
研究の概要	<p>結核菌の遺伝子解析を実施し、富山県における結核菌の感染状況とその動向を把握するとともに、集団感染や院内感染等が発生した場合の感染源・感染経路の究明や感染拡大防止に活用する。</p>	
判定	承認	